０２・ご挨拶

Twitter や YouTube で、動画にして投稿する宣伝用ボイス。
そのため、頭の空白は他のトラックより短く、一秒程度にする。

内容としては、前日譚０１から四十五分ほど後。
ミネルヴァによる、最初の挨拶。

ミネルヴァは今、たったいま助手として採用した主人公に、自己紹介をしている。
その声は淡々とした、感情に乏しいトーンだ。
だが、本人としては非常に嬉しく、ワクワク、ドキドキと緊張している状態である。
しかしそれは、本人の身体の、ほぼどこにも表れていない。
顔はいつも通り人形と見紛うほどに白く、無表情。
声も、数々の感情を胸に秘めておきながら、いつも通り極端にダウナーである。
なので……もし彼女の胸に耳を当てて、よぉく耳を澄まして聞けば。心臓の鼓動が、いつもよりほんの少し早いような気がしないでもない。
その手を強く、強く握りしめてみれば。指先がいつもより冷たいといえば冷たい……。

もっともそれは、強く握っているからだけな気もするが……。
といった程度の変化が、かろうじて起きているのみである。

ゆえに、ミネルヴァの緊張や期待は、主人公には全く伝わっていない。
主人公は、

……一応、採用していただけたみたいだけれど……。
クロエの話通り、ミネルヴァさんって、何を考えているか、どうもわからない感じの方ね。
――わたし、ちゃんとやってけるのかしら。

と、思っている。

だがミネルヴァは、それにまったく気付いていない。
ミネルヴァは、人一倍他者に強い関心を抱いている。
であるにもかかわらず、人の心の機微には、とことん疎いのである。

●正面　３０センチ

「【淡々とした、感情に乏しいトーンで挨拶と自己紹介を始める。
ミネルヴァは、ささやいていない時でも、まるでささやいているかのような、ウィスパー気味の話し方をする】
私はミネルヴァ。
魔女です。
【一呼吸おいてから。
少し考えてから、自己評価を述べる。
本人としては、内心ニッコニコ。
『世の中の役に立ちたいと願っている私は、きっとよい魔女といってよいはず……！』
『そんな自分なら、主人公さんときっとうまくいくに違いないわ。だって志が一緒だもの』
という考えを根拠に言っている】
うん。きっと、いい魔女」

〈主人公〉
「？
……アリス・ルブルトンです。どうぞよろしくお願いします」

こうしてミネルヴァが早速珍妙な自己紹介を始めたおかげで、主人公は混乱していた。

先ほど簡単な面接を受け、無事採用されたのはよかった。
だが、ただでさえ体調がすぐれないところに、新しい雇用主が奇妙な事を言い出した。
そのせいか、いよいよ目の前がぐらぐらしてきて、考えがまるでまとまらないからだ。
だから主人公はミネルヴァの事を、

……『きっと、いい魔女』？
『いい魔女』なら、まだしも。
『【きっと】いい魔女』って、どういった事かしら。
……わからない。
さっきからこっち、彼女のおっしゃる事が、一から十まで全部わからないわ。

と、かなり困惑し、少々警戒していた。

そんな主人公は今、まるで紙に書かれた読みづらい文字を一生懸命読もうとしているがごとく、眉をぎゅわっと寄せ。
そのうえ、頭に巨大なクエスチョンマークが浮かぶあまり、首どころか身体全体を大きくかしげていた。
それでも、ミネルヴァはどこ吹く風だ。

もし、ミネルヴァに主人公の気持ちが少しでも読み取れたのなら。彼女は変わらず無表情のまま。それでも内心はそれなりに慌てて、補足を試みただろう。

自分が一体どのような志と意思を持って主人公を雇い、これから何をしようとしているのか。

それらを、彼女なりに懸命に伝えただろう。

だが、実際のミネルヴァは『問題なく自己紹介ができたみたい』とすっかり安心し、主人公の反応を、まるで見当違いの解釈で受け取っている。それどころか、おびえている主人公を『小さな生き物のようでかわいいわ。そう、ネズミさんみたい』とさえ思っている。

なので、もう次の話題に移ろうとしているのだ。

なぜならミネルヴァは今、とても気持ちが急いている。

主人公の事を『普通の助手の仕事でない事を理解した上で、それでも応募してくれたなんて。なんて尊く高い意識を持った、素晴らしい女性なのかしら』と感激し、一方的にハイになっているのだ。

それに実を言うと、ミネルヴァは主人公の事を知っていた。

『あの』国立研究所所長に屈さなかった、噂の女の子。

そんな主人公をミネルヴァは、端的に言えば『面白い女性』だと思っているのだった。

●正面　30センチ

「【淡々とした、感情に乏しいトーンで主人公への謝辞を述べる。
心の中では主人公を心から歓迎し、とてもワクワクドキドキ。
ハイテンションなのだが、それが表にはまったく出ていない】
私の助手になってくれてありがとう。
貴方の協力があれば、きっと、沢山の人が救われます。
【ほんの少しだけ心配そうに。
主人公がこれから助手として成す事は、自分の研究の補助である。
だが、それは様々な手段を用いた、少々特殊なものなので。
そういった『慣れない事をさせる』という点では、ミネルヴァはまっとうに主人公を心配しているので】
実験は……ちょっと大変かもしれないけど。
【さらっと元のトーンに戻って。
実験台となった際の、メリットを述べている。
ミネルヴァとしては、このメリットを伝えた事で、かなり明るい気持ちになっている。
『こういう良い事があるのだから、主人公さんも喜んで、また安心してくれるはず！』
と思っている。
だが、またも説明が足りない。主人公には何も伝わらない。
そもそも一般的に『実験』と『気持ちいい』は結び付きにくい言葉である。

なので『どうしてそれらがくっついているのか？』という事から、まずミネルヴァは説明しなくてはならない。
だが、ミネルヴァはそれをわかっていない。
この発言に違和感を抱いていないのである】
きっと気持ちいいと思うから」

〈主人公〉
「……？」

このように、ミネルヴァはその容姿や、ささやかれている悪い噂に対して、内面は善良で非常に前向き、感情も豊かにあり、奉仕精神も大変強い人物である。
だが、感性が驚くほどに一般人とはずれており『ちょっとそれはどうか』と思うほどの結果主義で、そして、とにかく説明が下手だった。
研究に没頭しすぎて、友達のいない人生だったからである。
たまに――……誰かがそばに来てくれた時も。いつも失敗して、関係を維持する事ができなかったからだ。
ゆえにミネルヴァは、やっぱり気づいていない。
ミネルヴァの言葉は、主人公にとって理解の範疇を超えている。

その結果、咀嚼に苦労した主人公の眉間がすっかりしわしわになり、ただでさえ白いと言われている肌が、いよいよ不健康な白さになり始めている事も。
その説明不足のせいで、これから主人公は、様々な苦労をする羽目になる事も。
ミネルヴァは、まるでわかっていないのである。
だが、そんなミネルヴァでも気づく事は一つあった。

……ところで彼女、ずいぶんと具合が悪そうだわ。
できるだけ、早く切り上げてあげなくちゃ。

と、いう事である。
だからミネルヴァは、また次の話を始めた。
ミネルヴァなりに主人公を思っているものの、それがまったく届かない行動をとり続ける。
というか今日は……とにかくこれが言いたくて仕方なかったのだ。

●正面　３０センチ
「【ぽっぽっと淡々とした、感情に乏しいトーンで提案する。
本人としては『よし！　言ったわ！　今日はこれを伝えたかったの！　きゃー！』位ド

キドキしているのだが、やはり全く声にも表情にも表れていない】

そうだ。私の事は自由に呼んでほしいの。

貴方と仲良くなりたいから。

【『ほんのわずかに楽しそう』程度の、感情に乏しいトーンで提案する。

本人としては『名案！』『ぜひ一度あだ名で呼ばれてみたかったの。とっても親しい間柄な気がするから。主人公さんがそう呼んでくれたら、私、とても嬉しいわ』くらいのハイテンションなのだが、やっぱり声は全く変わらない】

そうね……『みーちゃん』なんてどうかしら？」

ここでフェードアウトして終了。